

## 短報

## ハクサンオオバコについて (山崎 敬)

Takasi YAMAZAKI: On *Plantago hakusanensis* Koidz.

ハクサンオオバコは、秋田県森吉山から石川県白山に至る、主に日本海側の亜高山帯の湿原に成育している。しかし、白山のものと白馬岳、立山に見られるものとは少し異なる。白山のものは多少の程度の差はあるが葉柄や葉身に毛が生えている。特に若葉では顕著である(図1-a)。白馬岳、立山のものは多くが若葉から無毛である(図1-b)。しかし東北地方の飯豊山、月山、森吉山では毛のあるものと無毛のものが混っている。鳥海山では無毛のものが多く、白山では毛の少ないものから多いものまで変異があり、ここに載せた写真は毛の多い方である。しかし白馬岳、立山では今のところ殆どが無毛である。したがって毛の有無は単なる個体変異でなく、遺伝的な性質と思われる。小泉先生が新種を記載された際に Type は指定されず、白山から東北地方まで分布するとされている。村田源氏に京都大学の標本を調べてい

ただいたところ、小泉先生が新種の学名を手記された標本が白山、飯豊山、月山(2枚)、鳥海山の5枚あり、原記載に葉に毛があると書かれていて、それと一致する白山(二階重楼 Aug. 15, 1909)を Lectotype としたいと連絡してこられたのでそれを基準とし、無毛品をケナシハクサンオオバコとして品種として区別しておきたい。このことよりもっと問題なのは近縁種との関係である。

ハクサンオオバコは非常に変わった種で、成育した株には側根だけで主根がない。これはやや湿り気のある場所に生えるオオバコ類の一般的な特徴で、オオバコも同じであるが、オオバコ節の種類では葯の先端に短い突起があり、種子は一個の果実に4-14個が普通で、背面には点状のへこみがあるが、ハクサンオオバコでは葯の先端に細長い突起があり、種子は2個で、その背面は広くへこんでいる。こうした特徴を持つ種類はシベリア、



Fig. 1 a. *Plantago hakusanensis* Koidz. f. *hakusanensis*. (Mt. Hakusan, photo. by K. Yoneyama).  
b. f. *glabra* Yamazaki (Mt. Tateyama, photo. by Y. Dohi).

アラスカ、北アメリカには存在しない。したがって近縁種のない独立の節に位置する日本固有の特殊な種でないかと考えていたが、*P. gentianoides* Sibth. et Smith が非常に近い種であることが分かった。これはスカンジナビアからトルコを通り、アフガニスタンに至るかなり広い範囲に分布する。種子の形、蒴の形など完全に一致する。アフガニスタンのものは変種とされていてやや異なるが、中央アジアのものはハクサンオオバコとどこが違うかわからないほどよく似た種類である。雪解け水の流れる湿地に生えるというから成育環境も似ている。オオバコ科全体の分類を行った Pilger (1937) はハクサンオオバコを十分に認識してなくて、これをオオバコ節のものとして扱っていて、*P. gentianoides* 1種だけでひとつの節を作っている。ハクサンオオバコも含めるとこの節には2種あることになる。日本の雪田群落を構成する種類の来歴は非常に複雑である。その中でもハクサンオオバコのような例は珍しいが、日本の雪田群落の解明には中央アジアに広がる二千から三千メートルの山地の積雪地帯の植物の研究も必要で

あることを示している。

京都大学の標本を調べて下さった村田 源氏、写真を提供して下さった米山競一、土肥行雄氏に深謝します。

*Plantago hakusanensis* Koidzumi f. *glabra* Yamazaki, f. nov.

Jap. nam. Kenashi-hakusan-obako.

Folia glabra. Cetera ut in typo.

Hab. Honshu, Nagano pref., Mt. Shirouma, Ohike (M. Honda, July 29, 1928, Type, TI).

Distr. the Japan Sea side of Honshu from Nagano and Toyama Prefs. to Akita Pref.

*Plantago hakusanensis* Koidz. has anthers with a slender acuminate projection at the apex and seeds concaved at the ventral face. These features are same as those of *P. gentianoides* Sibth. et Smith of C. Asia belonging to the monotypic section, *Gentianoides* Pilger.

(東京大学理学部附属植物園)

### ドウダンツツジの変異 (山中二男)

Tsugiwo YAMANAKA : Variations in Leaves of *Enkianthus perulatus* (Miq.) Schneid.

ドウダンツツジ *Enkianthus perulatus* (Miq.) Schneid. は、古くから栽培されていたながら、自生地が明らかになったのは1913年といわれるから(吉永1914, 中井1936), それほど昔のことではない。今では、本州の伊豆半島以西の主として東海地方と四国のほか、九州にも分布することが知られている。生育地は多くないが、静岡県島田市や引佐町、愛知県鳳来町と新城市、三重県鳥羽市の菅島と伊勢市の朝熊山、徳島県木沢村、高知市とその周辺などで、超塩基性岩地帯に群生するところもある。

ドウダンツツジの葉の形には変異が多い。野生しているのは、ほとんどが倒卵形のヒロハドウダンツツジで、中井はこれを var. *japonicus* (Hook. f.) Nakai in J. Jpn. Bot. 12 : 896 (1936) と

した。栽培のドウダンツツジでよく見られる葉の広皮針形～狭倒卵形のは、高知県日高村だけにしか自生が知られていないとされてきた。

北村 (1971) は、「(日高村) 錦山には葉が広卵形のものもあり、変種として区別するのは困難である」として、ヒロハドウダンツツジを f. *japonicus* (Hook. f.) Kitamura in Act. Phytotax. Geobot. 25 : 36 (1972) に変えた。山崎 (1989) は、「(ドウダンツツジは) 広く栽培され、似たものが高知県日高村の錦山に野生する。…錦山にはヒロハドウダンツツジもあり、ドウダンツツジは葉の狭いものを選んで園芸化したのであろう」と述べている。

こうしたことから、錦山には葉の狭いドウダンツツジが普通のようにも思われているが、実際は